



佐賀の漁師町のひとつ、浜町地区に、宇大町があります。この大町の佐賀港を望む道脇にある、小さな祠を皆さんはご存じでしょうか。この祠には、古くからの漁師町であるこの地域一帯で、詳しい年代なども不明なほどずっと昔に、自らの身を犠牲にして、漁師たちを守ろうとした「大町九兵衛さん」という実在した人物が祀られています。

この大町九兵衛さんの話は、昭和57年に佐賀町老人クラブ連合会によって編集・発行された「さが昔ばなし」にも、クラブ会員であった浜町地区の故吉本元吉さんによって寄稿され、今に残されています。

大町九兵衛さん



昭和40年以降の佐賀港改修の際、新しく祠を立て直し、港を望む見晴らしのよい場所に移動されたそうです。

さが昔ばなしによると：ずーっと昔のある年、大雨で佐賀を流れる伊与木川が大洪水となり、村全体が大きな被害を受けました。そのうち雨もあがり、よい天気になった日のこと、漁に出た漁師たちは海に浮かぶ大量の流木を目にします。家屋や船の修繕にうってつけの材料です。みんな、船一ぱいとその流木を積んで帰りました。

その流木の中には、立派な木材も多く、どうやらお上のものが混ざっていたようです。あちこちの村が当時の取締役人の厳しい調査を受け、遂に佐賀の漁師もその調査を受け



大町さんの話を地域の中から広めていきたいです。人形劇のご希望があれば喜んで披露させていただきます。

ることになりました。水主頭であった(庄屋さんとも言われています)大町さんは、とても責任感が強い方で、呼び出しを受けた漁師たちの身を案じて大変悩んでいました。城に呼び出された漁師たちの取り調べは無事に済み、罪にはなりません。このことを早く大町さんに知らせようと、早馬に乗った連絡人が佐賀村に急ぎます。

ところが、その早馬がやつと村を見渡せる椎木坂までたどり着いた頃、遅い連絡に心配した大町さんは「これはみんな私の責任だ、私が責めを負えば漁師は助かる」と、その知らせを聞く前に自ら切腹し、命を絶つたといわれています。

その後、この地域では、漁師を一番に思い自分を犠牲にしてまで守ろうとしてくれた大町さんに報いるため、そしてそれを後世へ残すため、毎年盆祭り「大町さん」で供養が行われているのだそうです。

現在、この地域で大町さんの話を語り継いでいこうとする取り組みが始まっています。港町に昔から伝えられ、みんなから慕われている大町さんのことを、もっとたくさんの人に知ってもらいたい、後世まで残していきたい、という地域の方々の思いからです。佐賀地区では以前、保育所のお話を人形劇にして子どもたちに披露したことがあります。この人形たちを使って、大町さんの話を分りやすく知ってもらうことができるのではないかと、当時の保育士であり、現在は漁家民宿を営む明神妙子さんと明神みやさんが思いついたのがきっかけとなりました。